THE JAPAN P.E.N. CLUB

日本ペンクラブガイド GUIDE

一般社団法人 日本ペンクラブ

THE JAPANESE CENTER OF INTERNATIONAL PEN

これからのペン——について、作家の桐野夏生会長、中島京子さん、角田光代さんで話し合っていただきました（2024年5月）

左から角田さん、桐野会長、中島さん（撮影・坂本貴光）

ペンに入ったきっかけは

桐野　ペンクラブには、若いころからすごく興味がありました。ただ、文藝家協会は文学賞をとるとお誘いがあるし、推理作家協会も乱歩賞をとると自然に入会となるのですが、ペンクラブはどうやって入ればいいか分からなかった。ある時、図書館がデジタル化を進めることに関する説明会に行ったときにペンクラブの方と会って、入れていただくことになりました。10年ぐらい前でしょうか。ただ、ずっと不活動会員で、ペンクラブが何をしているかもよく知らなかった。会長になってからこの3年ですいぶん勉強しました。

中島　私は2009年に、世界の作家の交流プログラムでアメリカのアイオワに3か月行きました。それで、外国の作家と交流したい気持ちがいっぱいだったところへ、2010年に国際ペン東京大会があったんです。会員でないと参加できないイベントもあったので、編集者で会員だったいとこに頼んで、入れてもらいました。もうとっくに作家になっていましたが、やはりどうやって入っていいか分からなかった。

桐野　いろんな方に入っていただく機会を逸していますよね、ペンクラブは。

角田　私も文藝家協会には早くから入りましたが、ペンクラブは数年前です。作家の友人たちがペンクラブで熱心に活動していて、入ることになりました。

ペンクラブの意義？

角田　ペンクラブの声明を最近よく目にするようになりました。とても意義のあることだと思います。

中島　物書きはみんな一人で仕事していて同僚もいない。何か世の中にもやもやすることがあっても、どうしたらいいか分からない。共謀罪や安保法といった法律が立て続けにできて、悪い方向に国が向かっていたときに、それに物申すペンクラブの声明を知って、それでペンに入ったという人もいます。声明が出て良かったと思っている人は多いと思います。

桐野　それは嬉しいですね。私たちは一人で表現しているから、自分との闘いもあり、出版社との闘いもあり、SNSなどの世論との闘いもあり、いろんなものと闘わなくちゃいけない。そういうときに、表現者たちが助け合って、一人の問題をみんなで考えるという団体があってもいいし、重要と思います。文藝家協会は保険とかお墓とか著作権とか、現実的なことに対応しているけれど、ペンクラブは、私たちが闘わなければならないことをみんなで考える、そういう団体になればいいと思います。

中島　私も最近までは、実はそれほど活動はしていなかったのですが、イベントでお声がかかって地方に行くのは楽しかった。『やさしい猫』という小説を書いて、非正規滞在の外国人のことを知りました。その実態は、たぶん誰でも、知ったらなんとかしなくては、と思うような状況でした。ペンクラブという組織があったので、「出入国管理及び難民認定

法改正案に反対する」意見書を出すという形に出来て良かったです。

桐野　会長を依頼されたときは、実は本当に迷いました。作家って、孤独な道を行きたいじゃないですか。でも社会に、頭に来ることはたくさんあったし、ここで引き受けなければ女じゃないと思って(笑)。やってみて分かったのは、ちょっと気になっていた嫌なことが、ここで明確化される、ということでした。ボランティアなので忙しいときは本当につらいのですが、みんなでわいわい、ちょっと文化祭のような雰囲気があるのは面白いです。作家として一人でずっとやってきたので、最初は団体でやるということに違和感もありましたが、今は面白い経験だと思っています。

中島　確かに団体行動には違和感を抱えつつ、ですね。

桐野　作家は小説の中で闘えばいいという考え方もあるでしょうが、そこから一歩外に出て、発言していくことは、人間として大事なことと思っています。

角田　私も勉強しなくては、と思いました。知ろうとしないと知らないままですね。

桐野　ただ、発信が下手かもしれない、この団体は。

中島　ペンクラブに入ることのメリットが伝えにくい。表現の自由、言論の自由という表現者の砦として始まった団体ですが、「世界平和のためにペンクラブに入りましょう!」なんて言ったら、浮世離れしてしまう(笑)。だから誘いにくいというのはあります。

桐野　物書きとしての矜持も邪魔をしますよね。

中島　でも表現や言論が自由じゃない国なんて山ほどあるし、この先、日本だってどうなるか分からないということを考えると、必要な団体です。

角田　たとえば、映像化などでトラブルになったときに、ペンクラブに相談窓口のようなものはあるのですか。

桐野　よくぞ聞いてくれました(笑)。これまでは無かったんですが、今度相談窓口を作ることになりました。ペンの会員に限るけれど、なにか問題が起きて弁護士が必要だとか、出版社とどう交渉していいか分からない、というときのための窓口です。

角田　それは頼もしいです!

桐野　SNSなどの誹謗中傷も、それこそ表現の自由にかかわることだし、根深い問題でもある。みんなで考えられればいい。日本のマスコミは男社会だから、女性の表現者は男性とは違うハラスメントを受けたり、ということが必ずあります。ペンクラブとして、そういうことにも向き合っていきたいと思います。

こうなってほしいペンクラブ

中島　何か楽し気なことがあるといいかもしれませんね。ポッドキャストみたいなことならすぐ出来るのでは。お話の上手な作家さん、何人かで。

桐野　そういうことが得意な人もいるでしょうね。地方の会員は委員会には参加しにくいかもしれないけれど、コロナ以降、オンラインにみな慣れたから、地方の人も積極的に参加してほしいですね。

角田　懇親会なども、現役の作家がおおぜい参加していれば、活気づくかもしれません。

中島　文学フリマとかやるといいんじゃないでしょうか。ペンクラブの作家が出店してサイン本を売るとか。なんか楽しそうと、みんな思ってくれそう。

桐野　若い人に、ぜひペンクラブに入っていただきたいですね。入会金も下げたし、準会員という制度も作ったし。でも、やはりまだまだ周知が足りない。

角田　ペンクラブに入るとかっこいい、というイメージがあるといいですよね。桐野さんが会長なのは、そういう意味でとてもいいと思います。初の女性会長ということ自体がかっこいいし、注目もされるし、期待してる人も多いと思う。それで実際変わると思うし、変わらないわけがないです。

桐野　昔は文化全体を率いるのが文学でした。今は文化も多様化して、文学も単なるその一ジャンルになってしまいましたが、言葉を使ってものを書いているわけだから、そこで何か出来ることをやれればいい。

中島　正直、イベントはもっとコンパクトでもいいと思います。小さい本屋さんで朗読会をやるとか。「日本ペンクラブのイベント」というと、どうしても敷居が高いイメージがあるかもしれません。

桐野　そういえば、2005年ごろ、ニューヨークであった国際ペンのイベントに招聘されて参加しました。それで日本ペンクラブに入れるかと思ったら、それでもお誘いがなかった(笑)。

角田　勧誘が全然足りていない。言われれば入る人はたくさんいると思います。

桐野　昔は、ペンクラブはなかなか入れなくて、会員であることがステイタス、というような団体でした。これからは、表現者たちが集まる楽しいクラブ、親睦会と思ってくれればいいと思います。変わっていかないといけないと思う。理念は高く持っているべきだけれど、このままだと会員が減っていくから、理念を高く持ちつつ衰退をいかにくい止めるか。楽しくしていくのも重要。新人作家にもどんどん声をかけましょう。理念は高く、敷居は低く。

(まとめ・小林加津子)

ペンクラブは こんな活動をしています

日本ペンクラブには、13の「委員会」があります。
それぞれの分野に得意な会員が集まって、精力的に活動をしています。

（執筆者は2024年度の各委員長）

自由にものが言える世界を！ （言論表現委員会）

言論表現委員会は、文字通り、言論･表現の自由にまつわるテーマをめぐって、国の内外を問わず真摯に向き合い、闊達に議論し、自由を侵す動きに対して、敢然と行動することをめざしてきた一委員会です。つい最近『日本ペンクラブ五十年史』を読む機会があり、今からちょうど半世紀前のペンクラブ史の一端に触れ感慨を覚えました。ソ連からソルジェニーツィンが国外追放され、第四次中東戦争の勃発で国際ペンのイスラエル大会開催が延期され、韓国の詩人･金芝河の逮捕、死刑判決という激動に際し、ペンクラブは大きく揺れます。『五十年史』では「異常事態」と表現されています。熱い季節の中、当時の石川達三会長が就任会見（1975年）で「言論･表現の自由はペンクラブの大きな柱である」と述べ、その取り組みのためにと言論表現委員会が新設されたことを知りました。

『日本ペンクラブ五十年史』1987年

そして今。ロシアによるウクライナ侵攻、ガザでの市民虐殺、アフガニスタンでの詩作の禁止……歴史は繰り返すと言います。ウクライナ、ガザ、原発、沖縄、憲法などをめぐる、ペン外部での「異常事態」は、言論･表現の自由をあっけらかんと踏みつぶそうとしているようにみえます。この国の人々は何と従順でしょうか。自由にものが言える世界を！ （金平茂紀）

海外の作家とつながろう （国際委員会）

国際委員会は、国際ペン本部や各地域のペンセンター、作家団体と連携し、海外との連絡や折衝を行います。言論･表現、文芸、人権、テロと戦争などの課題について、国際的視野に基づく日本ペンクラブの活動を推進します。海外作家の日本への招聘を通じ、日本の作家及び読者との交流を促進する一方で、日本の作家を海外に積極的に紹介し、国際社会に於ける、人と人との相互理解に尽力して参ります。

コロナ禍中では、取り分け、人と人との交流に関して多くの制限があり、海外作家とのオンライン･イヴェントの開催など、新たな試みを行って参りました。状況が落ち着き、2023年以降は、ウクライナペン名誉会長の来日、シアトル～バンクーバーでの北米日本文学フォーラムへの参加と、意欲的に活動を再開しております。

世界情勢は、混迷の度合いを深め、各地で痛ましい戦争が続いていますが、まさにこのような状況に於いてこそ、文学は真価を問われています。国際委員会として、より良き世界への貢献の道を今後も模索して参ります。 （平野啓一郎）

2024年3月、カナダのバンクーバーで開催された「北米日本文学フォーラム」

人類とその文化の生き残りのために　（環境委員会）

毎日のように体感され、又報道される異常気象。環境委員会では気候変動と人類の諸活動との関係を危機的なこととととらえ、いかにして人間の諸活動を循環可能とし、環境に負荷のかからないものにしていくかを学び、考え、発信しています。特に2011年の東日本大震災に起因する福島第一原発の事故を取り返しのつかない環境汚染であるととらえ、原発問題に、積極的にかかわっています。

2012年4月には、環境委員会としてウクライナのチョルノービリ（チェルノブイリ）原発を現地視察し、石棺だけではなく、原発のあったプリピャチ市の旧住民や被曝した子供たちを集中的に治療している医療機関を訪れ、直接原発事故による放射能被害の実態を聞くなどしてきました。その成果を、福島はもちろん、人類の過去・現在・未来へと生かすべく、福島第一原発の視察、原子力や代替エネルギー専門家を招いての学習会、それをもとにした（いわゆる）処理水海洋放出に対するパブコメ、そして原発に関する映画の上映やシンポジウムの開催などを絶えずおこなっています。

（宮﨑信也）

2019年、福島第一原発構内視察

未来につなぐ電子図書館に参加しよう　（電子文藝館委員会）

「電子文藝館」（http://bungeikan.jp/）は、インターネット上で本を読むことがまだ一般的ではなかった2001年に始まったペンのプロジェクトで、会員の手で「電子図書館」をつくろうというユニークな試みです。ペンクラブ会員の作品を中心に、天保5（1835）年生まれの福澤諭吉「学問のすゝめ」から現在にいたる、英語訳・フランス語訳を含む1000点を超す小説・詩歌・戯曲・評論・随筆などを公開し、約200年間の「文学の流れ」を知ることができます。すぐれた文学作品を誰もが読めるようにするとともに、私たち自身の作品によってペン会員の全体像を表す電子図書館であり文学選集です。今後もさらに充実させていきますので、自薦・他薦含め、会員のみなさまのご協力をお願いいたします。

（佐久間文子）

こちらのQRコードから開いてみてください

まだまだあるぞ！ 読みたい本が　（編集出版委員会）

編集出版委員会では、小説、エッセイ、評論から詩、短歌、俳句に至るまでありとあらゆる日本の活字文化を世界に発信するべく、日々活動をしています。

絶版になってしまっている名著名作を復刊したり、新しいコンセプトで短編集を編み直したり、また日本や世界が抱えている大きな問題に対して日本ペンクラブの視点で綴った評論集を上梓したりと、その活動は多岐にわたっています。ただ、私たちの活動の唯一の決まりは、メンバーが納得し承認された企画を、紙の書籍として後世に残すということだけです。メンバーは本当に書籍大好き人間ばかりです。皆さんも私たちと一緒に活字の海へ旅立ちませんか。

（宍戸健司）

ペンクラブが企画協力した『菊池寛が落語になる日』（文藝春秋、2022）

#me too運動が不要になる日を目指して　（女性作家委員会）

2017年にアメリカで巻き起こった#me too運動以降、日本でも伊藤詩織さんをはじめ、さまざまな被害当事者が声をあげてくださり、構造的に隠されてきた問題が明るみに出ています。女性作家委員会では「日本の性暴力／ハラスメントを考える」というテーマでイベントを重ね、ジェンダーの視点から発信してきました。作家だけではなく、被害当事者の方、現場の支援者、学者など、多様な立場の方にご登壇いただいています。

一方、当事者に対する激しい誹謗中傷があることも事実です。私たちは被害を受けた方々と共にありたいと考えています。今、私たちが文学・言論・表現の世界から何かを自由に発信できるのは、先人たちの勇気や努力があってのことです。その歴史をふまえ、日本および世界の、女性や虐げられているあらゆる属性の方々と共に在るのが、この委員会の役割だと思います。

昨年国連は、完全なジェンダー平等に300年かかると試算しました。本来は、次世代にこの課題を渡したくはありません。理想は、#me too運動が不要となり、いずれは女性作家委員会もなくなる社会です。価値の転換点である今に意識を持ちつつ、その日に向けて委員会のメンバーと一緒に考えていきたいと思います。（吉田千亜）

2022年12月、オンラインで開催された「日本の性暴力について考える」

人間らしく生きる権利のために　（獄中作家・人権委員会）

獄中作家委員会（Writers in Prison）はそもそも、言論活動を理由に投獄された作家や表現者の救援活動を行うことを目的としており、国際ペンではもっとも活発な委員会です。日本国内には獄中作家がいないので、直接的な支援はとくにしていませんが、タリバン政権下、詩作禁止令が発令されたアフガニスタンの芸術家たちの状況を知るためのイベントを準備中で、2024年8月開催を予定しています。アフガニスタンでは女性たちの教育そのものが禁止されたという厳しい状況の中、わたしたちにできることを考えています。

また、2024年2月には、国内人権問題の一つとして、小説作品に絡めて入管問題を取り上げ、オンラインでの勉強会を開催し、500人を超える視聴者に参加いただきました。人権は、人間らしく生きるための権利であり、誰もが平等に持つものですが、わたしたちの国・日本では、それが十分には理解されていないように思います。わたしたちは、文学者・表現者の視点から、人権に関する議論を深めていければと思っています。

（中島京子）

2024年2月に開催の、入管問題を考える公開オンラインセミナー

今こそ憲法と平和を発信！

（平和委員会）

坂道を転がり落ちるような時代。

大国が小国を蹂躙し、子どもたちが容赦なく殺される。

日本では、憲法の議論をすることもなく、「歴史的な転換点」として集団的自衛権行使容認に続き、防衛費倍増、敵基地攻撃能力保持等によって戦争への準備にひた走っています。

沖縄では、もとより憲法など存在しないかのように基地に占領され、人権は踏みつぶされ続けています。

こんな時だからこそ、私たちは、声を上げ、考え続けなければなりません。希望を生み出していかなければなりません。

そのために当会では、“PEN THE PEACE－憲法と沖縄－”と題し、トークとアートパフォーマンスを組み合わせたイベントを連続開催しています。

日本ペンクラブの役割は明快です。使命感を持って活動していきましょう。（島昭宏）

2021年11月のイベント“PEN THE PEACE”「危機に直面する報道の自由」

我々のことを知ってほしい！

（広報委員会）

90年近い歴史を持つ日本ペンクラブですが、まだまだその存在を知らない人も多いのが事実です。とても有意義な各委員会の活動を、もっと内外に知ってもらうために、ホームページやYouTube「日本ペンクラブ公式チャンネル」の運営、FacebookやX、そして広報誌を通じての広報活動で、日本ペンクラブのさらなる周知を目指します。（小林加津子）

まさに「縁の下の力持ち」

（財務委員会）

財務委員会は、各委員会の事業計画に基づく予算策定や、各種イベントでの謝金規程の改訂案の提言などをしています。これからも、予算計画に基づく月々の収支の精査と報告、財政基盤確立のための中長期的な方策の検討などに取り組んでまいります。すべては、活発かつ安定したペン活動のため。「平和の希求」「言論・表現の自由の追求」という理念のもと、皆様が安心して積極的に活動できますよう、財務運営という立場からペンを支えてゆきます！

（西澤昭方）

子どもの本から豊かな未来を考える （「子どもの本」委員会）

「人は、たとえ宗教や政治で折り合えなくても、一冊の子どもの本を介してならば、世界中の誰とでも手を取り合える」。「子どもの本」委員会はこうした思いから、国際ペン東京大会2010にむけて新設され、プラハブックフェアに参加したり、2011年にはベルリンで3日間にわたる国際フォーラムを開催したりしました。

2023年10月、岡山で開かれたイベント「読書の秘密」

その後は国内各地でも、その地域ならではのテーマのもと地元の高校生たちも登壇者に迎えて、読書の豊かさや子どもの本の可能性を考えるシンポジウムを開いています。また東日本大震災後、毎年3月には「ポスト3. 11 子どもたちの未来 子どもの本の未来」をさまざまな切り口で開催しています。委員会の企画による書籍『10歳の質問箱』『続・10歳の質問箱』『泣いたあとは、新しい靴をはこう。』は重版を続けており、2023年秋からはインターネットラジオstand.fmで、委員や部員による自作の朗読と、その作品の背景などを聞き手がインタビューする「読みたいラジオ」も始めました。毎週金曜日午後5時配信の30分番組で、聞けば本を読みたくなるひとときをめざして収録を続けています。

（河野万里子）

開催事業を盛り上げます！ （企画事業委員会）

多彩な委員会メンバーが積み重ねてきた経験を活かし、開催事業の魅力的な講師の選定からプログラムの吟味、当日の受付、進行、撤収までを迅速に行います。会員が懇親しやすいようご紹介やアテンドもしています。主に創立記念日（11月26日）を祝う「ペンの日」懇親会、会員同士の親睦と交流を図る例会（東京開催2回：総会日、9月を予定。京都開催1回：10月を予定）の運営に当たります。他、各委員会の大がかりなイベントにも協力の体制を取っております。参加者がご満足いただけるよう盛り上げてまいります。裏方に徹しながら、プロデュース力が培われる委員会です。

（伊藤木綿子）

2022年11月、「ペンの日」懇親会での新入会員紹介

会員がつながる場を作ります （会報委員会）

日本ペンクラブの会員は、日本全国、時には海外にも散らばっています。「ペンの日」などのイベントは主に東京開催なので、参加できない方も多いのが実情です。そこで、ペンクラブが何をしているかを伝え、その会員たちをつなぐのが、年に4回発行される会報です。加えて年に一度、テーマを設けて全国の会員に寄稿してもらう特別号も、楽しみにしている方は多いことでしょう。

一見地味な委員会ですが、ペンクラブには必要不可欠な存在です。

（小林加津子）

1953年、会報再刊第1号

創設のきっかけは戦禍に苦しんだ女性作家の思いから

国際ペン（PEN International）は1921年、ロンドンで創設された国際的な作家の団体です。

今や100か国に140のセンター（支部）を置き、文学の振興と言論表現の自由の擁護を支援する団体に成長していますが、最初は英国人女流作家、キャサリン・エイミー・ドーソン・スコットの呼びかけから始まりました。

第一次世界大戦の戦禍に苦しめられたスコットは戦争に疑問を感じ、世界の作家たちがお互い国境や政治思想、宗教の違いを超えて手を携え、戦争をなくすことはできないかと考え、作家たちに連帯を呼びかけました。

当初はなかなかそれに応じる作家はいませんでしたが、英国で最も有名な作家であったジョン・ゴールズワージーの協力を得て、1921年10月5日、ロンドンのソーホーにあるフローレンス・レストランに44人の作家たちが結集しました。

このときこの団体の名前を付けようということになり、Poet（詩人）、Essayist（随筆家）、Novelist（小説家）のそれぞれ頭文字をとってPEN（ペン）とし、初代会長にはゴールズワージーが就任しました。

その後も英国中の作家たちに参加を働きかけ、風刺に満ちた戯曲などを世に多数送り出し英国近代演劇を確立した、劇作家のジョージ・バーナード・ショウ（1925年にノーベル文学賞受賞）の参加表明によって、英国全土の作家に支持を得ました。

© Marjorie-Ann Watts

ペンクラブの提唱者、キャサリン・エイミー・ドーソン・スコット

ペン憲章が承認され経済的基盤も固まる1920～30年代

初期の国際ペンには、体験に基づく海洋小説で知られるジョゼフ・コンラッドや“SFの巨人”と呼ばれたH.G.ウェルズなどもメンバーとして参加していました。

国際ペンは当初、欧州を中心にセンターを展開しましたが、その呼び水となったのがパリ出身のアナトール・フランス（1921年にノーベル文学賞受賞）です。芥川龍之介が傾倒し、石川淳が翻訳した作家として日本でもよく知られた人物です。

国際ペンの精神に賛同したアナトール・フランスは欧州各国の作家たちに参加を呼びかけ、1923年にはロンドンで初めて国際ペン大会を開催することができました。その後2回目をニューヨーク、3回目をパリで開催しました。そして1927年のブリュッセル大会では、3つのシンプルな条文からなるペン憲章が承認されました。

1932年にはゴールズワージーがノーベル文学賞を受賞し、その賞金をすべて国際ペンの本部に寄贈し、これが国際ペンの経済的な基盤となりましたが、彼はその翌年に他界してしまいます。

第二次大戦下では紛争や迫害で逃れた作家たちを支援

その後を継いで2代目会長に就任したのがH.G.ウェルズです。まさに1933年1月にはアドルフ・ヒトラーがドイツの首相に任命され、ナチズムに基づく対外膨張政策が始動した時でもあります。

欧州には暗雲が垂れ込め、国際ペンが10年間思い描いてきた平和が脅かされつつありました。

この年、国際ペンはユーゴスラビア王国のドブロブニクで大会を開催しました。会場ではドイツの代表団に対してドイツ国内での実情について質問が飛びましたが、ナチスドイツによる知識人の迫害や焚書問題に関してドイツ代表団は口を閉ざし、ナチスドイツでの生活の実態を話そうとしたユダヤ系ドイツ人の劇作家、エルンスト・トラーを阻止しよ

うとしました。

それでもウェルズがトラーに発言の場を提供すると、ドイツ代表団は退席してしまい、ドイツのペンセンターはその後しばらく追放されました（復帰は1948年）。

登壇したトラーはこの時代の「狂気」と「野蛮」を批判して、「人類を嘘と不正義から解放する」ために「戦う」よう国際ペンのメンバーに呼びかけたのです。

その後、1938年のプラハ大会ではポーランドにおけるユダヤ人迫害が議題となり、反ユダヤ主義を含むあらゆる形態の迫害を非難する決議が採択されました。

ウェルズの後を受けて1936年3代目会長に就任したフランスの詩人、ジュール・ロマンは、ドイツ軍がフランスに侵攻した際に亡命し、欧州の政治的抑圧が強まる中で、国際ペンの真実に対する責任を強調する熱のこもった声明を発表しました。

その後第二次世界大戦までの数年間、国際ペンは活動家組織へと進化し、迫害にあって苦しむ作家の情報を集めて、援助を必要としている人々にお金や食料などを送りました。第二次世界大戦が勃発すると、紛争や迫害を逃れた数多くの作家がロンドンに避難し、国際ペンは財政的、社会的、精神的支援を提供しました。こうした取り組みは今日の国際ペンの活動の礎となっています。

国際連盟脱退で孤立化した日本にもクラブ設立

日本は1933年3月27日、国際連盟を脱退。国際的に孤立化を深める中で、島崎藤村を中心とする作家たちが、日本にも国際ペンの精神を引き継いだクラブを作ろうと動きます。そして1935年、国際ペンは、外務省ルートで日本にペンクラブ設立を求める要請を行い、およそ100名の作家が集まって日本ペンクラブが誕生しました。

初代会長の島崎は、1936年9月にはアルゼンチンのブエノスアイレスの大会に出席しました。日本が国際ペンに参加した初めての出来事です。その

2023年、国際ペン・ウプサラ（スウェーデン）大会

後1937年6月のパリ大会で日本ペンクラブは常任理事国に選ばれましたが、軍事統制が強まる中で、1942年活動休止に追い込まれます。再開したのは終戦2年後の1947年2月のことでした。

世界人権宣言の参考となった「ペン憲章」

国際ペンは戦後、モーリス・メーテルリンクやアルベルト・モラヴィア、アーサー・ミラーなどを会長に迎え、反戦や言論表現の自由を旗印に、センターを拡大。反戦の声明や投獄された作家やジャーナリストの解放に向けた支援の手を差し伸べています。

戦後の大きな転換点となったのは1946年のストックホルム大会です。1945年に国際連合（UN）が結成され、世界の新しい秩序が生まれました。

このような情勢を受け、国際ペンでは「妨げられない思想の原則」と「人種、階級、民族の憎悪を払拭し、一つの世界で平和に暮らす一つの人類の理想を支持する」という2つの決議が可決されました。平和、無差別、表現の自由に対する広範な公約は、のちにペン憲章に盛り込まれることになります。

1948年に国連第3回総会で採択された世界人権宣言は、ペン憲章を参考にしたといわれています。さらに1949年には、国際ペンは「世界の作家の代表」として国連の特別協議資格を得ました。

世界の作家やジャーナリストを救う

危機にさらされている作家を組織的に支援しようとする試みは、1950年代に始まります。冷戦が、東欧をはじめとする世界の表現の自由に与える影響が少なからずあったからです。そして1960年には獄中作家委員会（WiPC）が設立されました。

1960年のリオデジャネイロ大会で、獄中作家委員会は世界中の迫害された作家のケース30件を検討し、アルバニア、フランス、ルーマニア、チェコスロバキア、ハンガリーで拘留された作家のリスト5件を提示しました。獄中作家委員会はそれ以来ずっと、国際ペンの中心的組織として、表現の自由を行使したために国家権力から迫害された無数の作家、ジャーナリストを救うために活動しています。

国際ペンでは獄中作家委員会以外にも1978年には翻訳・言語権利委員会、1984年には平和委員会、1991年には女性作家委員会などの常設委員会を設置し、その活動の幅を拡大していますが、人権活動に関わる大部分は獄中作家委員会が担っています。

1989年、サルマン・ラシュディの『悪魔の詩』がイスラム教を侮辱したとして、イランのホメイニ師は、ラシュディや本の出版に関わった者に「死刑」の宣告をしました。国際ペンはその宣告を撤回させるキャンペーンを世界中で展開しましたが、ラシュディは数年間の潜伏を強いられ、2022年には実際に暗殺未遂事件が起こってしまいました。

宗教の尊厳と表現の自由という2つの権利の衝突は、2015年にパリで起こった「シャルリー・エブド襲撃事件」でも明らかになった難しい問題です。この事件について、国際ペンは以下の声明を出しました。

「どのように気分を害するものであれ、意見を述べた人々を黙らせたり、貶めたりするために、暴力を正当化することはできない」

世界各地で緊張が高まり、侵攻や紛争などが勃発している現代ですが、だからこそ、国際ペンの存在意義は、ますます大きくなっていくでしょう。

（松崎隆司）

参考：A Brief History of PEN International by Cathal Sheerin

2023年、国際ペン・アジア太平洋地区プロジェクト会議、マニラ（フィリピン）

国際ペン憲章

1. 文学に国境はない、よって政治的また国際的な紛糾にかかわることなく、人々が共有する価値あるものとすべきである。
2. あらゆる状況下において、特に戦時において、遍く全人類の遺産である文芸作品は、国家または政治の一時的な激情にさらされることなく保たれねばならない。
3. ペンの会員は、自らの影響力を、諸国間の理解と尊敬のために行使すべきである。会員は、人種・階級・国家間の憎しみを取り除くこと、一つの世界に平和に生きる無二の人類としての理想を守ることに、最善を尽くすことを誓う。
4. ペンは、国内および諸国間において、思想の伝達を妨げてはならないという原則を支持する。会員は、自らが所属する国や地域社会、さらに全世界においても可能な限り、表現の自由に対するあらゆる形態の抑圧に反対することを誓う。ペンは、報道の自由を宣言し、平時における専制的な検閲に反対する。ペンは、より高度に組織化された政治・経済の秩序へむかうために、世界が必要な進歩をなしとげるには、（立法・司法を含む）政府・行政・諸機関への自由な批判が不可欠であると信じる。また自由には自制を伴うゆえ、会員は、政治的・個人的な目的のために、欺瞞に満ちた出版、意図的な虚偽・事実の歪曲を行うといった、表現の自由の悪用に反対することを誓う。

※この憲章は、国際ペンと各ペンセンターのもっとも基本的な規範です。1から3までは、1921年の国際ペン設立時から掲げられ、4の「検閲」への反対は第二次世界大戦後に付け加えられたものです。

日本ペンクラブ 90年のあゆみ

第6代会長・中村光夫

川端康成がノーベル文学賞を受賞

中国で文化大革命

アメリカがベトナムに本格的軍事介入

第5代会長・芹沢光治良

川端康成会長が国際ペン副会長に選出

朝鮮戦争休戦

第4代会長・川端康成

第3代会長・志賀直哉

ストックホルムで戦後初の第18回国際ペン大会を開催

第二次世界大戦が終結

第2代会長・正宗白鳥

太平洋戦争勃発

ドイツのポーランド侵攻で

第二次世界大戦が勃発

初代会長・島崎藤村

1974(昭和49年)	7月、韓国の詩人、金芝河の減刑要請のため藤島泰輔、白井浩司らを韓国へ派遣 記者会見での藤島の発言をきっかけに大量脱会が発生
1972(昭和47年)	11月18～23日、「日本文化研究国際会議」を東京、京都で開催　参加39カ国
1968(昭和43年)	
1966(昭和41年)	2月、日本ペンクラブ創立記念日(11月26日)を「ペンの日」に制定
1965(昭和40年)	5月、「ベトナムにおける事態を憂うる」声明
1961(昭和36年)	3月、「嶋中事件」に対し、「言論表現の自由を暴力で抑圧することに反対する声明」
1960(昭和35年)	6月、日米新安保条約の批准承認に対する抗議声明
1958(昭和33年)	
1957(昭和32年)	9月2～8日、第29回国際ペン東京大会開催 26カ国30センターから代表者171名、日本ペン会員208名が参加
1953(昭和28年)	3月、ペン『会報』再刊第1号を発行 1月、チャタレイ裁判東京高裁有罪判決に対し反対と抗議の声明
1948(昭和23年)	6月、第20回国際ペン・コペンハーゲン(デンマーク)大会で日本ペンクラブの国際ペン復帰が承認される
1947(昭和22年)	2月、旧メンバーを含む文化人多数の手によって「日本ペンクラブ再建大会」を開催 「日本ペンクラブ」の名称を定め、第3代会長に志賀直哉を選出
1946(昭和21年)	
1945(昭和20年)	
1943(昭和18年)	
1942(昭和17年)	理事たちの徴用や応召で、日本ペン倶楽部は活動を停止
1941(昭和16年)	
1939(昭和14年)	
1937(昭和12年)	6月、第15回国際ペン・パリ(フランス)大会にて日本ペン倶楽部は常任理事国に選ばれた
1935(昭和10年)	初代会長に島崎藤村就任　当時の会名は「日本ペン倶楽部」 外務省の文化事業部関係者と国際文化振興会の斡旋により、11月26日に創立総会を開催

1957年　国際ペン東京大会

アフガニスタン戦争
9・11アメリカ同時多発テロ

第13代会長・梅原猛

大江健三郎がノーベル文学賞を受賞

第12代会長・尾崎秀樹

湾岸戦争　ソ連邦解体

東西ドイツ統一

第11代会長・大岡信

第10代会長・遠藤周作

井上靖会長が国際ペン副会長に決定

第9代会長・井上靖

韓国で光州事件

イラン革命

第8代会長・高橋健二

第7代会長・石川達三

ベトナム戦争終結

2001（平成13年）	11月、「ペンの日」にウェブサイト「ペン電子文藝館」を開館
	3月、「個人情報保護法案」の問題点を指摘する緊急声明
	1月、著作物の再販制廃止に反対する声明
2000（平成12年）	1月、「公安調査庁の日本ペンクラブ等に対する調査監視への抗議と要求」を発表
1999（平成11年）	2月、国民の知る権利としての情報公開法を求める緊急声明
1998（平成10年）	12月、イラクへの武力行使に抗議する声明
	5月、インドとパキスタンの核実験に対する声明
1997（平成9年）	7月、神戸事件の被疑者少年の顔写真が『フォーカス』に掲載されたことに対する声明
	6月、諫早湾干拓潮受け堤防に関する声明
1996（平成8年）	11月、「アジア・太平洋会議」開催。それに合わせ、第1回日中ペン交流中国ペン代表団が来日
	2月、沖縄の米軍基地問題に関する声明
1995（平成7年）	12月、破防法適用に関する抗議声明
1994（平成6年）	
1993（平成5年）	
1991（平成3年）	
1990（平成2年）	
1989（平成元年）	
1988（昭和63年）	11月、韓国の獄中作家5名を客員会員に選出、釈放要請の声明
1985（昭和60年）	3月3日、第1回「平和の日」の集い開催（以後、毎年開催）
1984（昭和59年）	5月14～18日、第47回国際ペン東京大会開催 参加センター45、海外から参加219名、日本ペン会員参加351名、一般参加53名 4月、年次総会で会員数が1000名を超えたことを報告
1981（昭和56年）	10月、第1回「獄中作家の日」講演会を開催（以後、毎年1回開催）
1980（昭和55年）	9月、「情報公開法制定」に関する声明
1979（昭和54年）	9月、「四畳半襖の下張裁判」の有罪判決に対し声明
1978（昭和53年）	5月、金芝河らを客員会員に
	4月、総会で定款の一部を改正し、政治的抑圧を受けている文筆家を支援する「客員会員」制を設ける
1977（昭和52年）	1月、金芝河の実刑判決に対する声明
1975（昭和50年）	

ロシアがウクライナに侵攻
第18代会長・桐野夏生
新型コロナ流行
第17代会長・吉岡忍
パリ同時多発テロ
第16代会長・浅田次郎
リーマンショック
第15代会長・阿刀田高
第14代会長・井上ひさし
イラク戦争

2024（令和6年）
5月、「国会の空洞化に抗議します」声明
4月、日本文藝家協会、日本推理作家協会と、読書バリアフリーに関する三団体共同声明

2022（令和4年）
3月、日本文藝家協会、日本推理作家協会と、ロシアのウクライナ侵攻に関する共同声明

2021（令和3年）

2020（令和2年）
10月、「全員を任命すべきである―政府の日本学術会議会員任命拒否をめぐって」声明

2017（平成29年）
6月、共謀罪強行採決に抗議する声明

2016（平成28年）
5月、改めて通信傍受法の改正に反対し廃案を求める声明

2015（平成27年）
7月、緊急声明「『安保法案』の強行採決に強く抗議します！」
4月、「ふるさとと文学」第一回、「島崎藤村の小諸」

2013（平成25年）
9月、特定秘密保護法案に反対する意見書
6月、憲法第九十六条改正に反対する声明
5月、政府と国会に対し、共通番号法案に反対する声明

2012（平成24年）
10月、原発再稼働への動きに強く反対する声明

2011（平成23年）

2010（平成22年）
9月23～30日、第76回国際ペン東京大会開催
参加センター85、海外から参加258名、日本ペン会員と一般参加合わせて6644名

2010年　国際ペン東京大会　早稲田大学大隈講堂にて

2009（平成21年）
2月、「横浜事件」再審裁判において表現の自由の回復を求める声明

2008（平成20年）
12月、中国政府に作家劉暁波氏の拘束を直ちに解くよう求める声明（獄中作家・人権委員会）
2月、世界ペンフォーラム「災害と文化」開催

2007（平成19年）
8月、出版社及び著述家に対する法務省勧告に抗議する声明

2004（平成16年）
10月、メールマガジン「P・E・N」第1号発行
6月、自衛隊の多国籍軍参加に反対する声明

2003（平成15年）
11月、「自衛隊のイラク派遣に反対する」声明
3月、「アメリカ、イギリスのイラク攻撃に抗議する緊急」声明

2002（平成14年）
7月、「住民基本台帳ネットワークシステム」の強行に対する抗議声明
4月、「有事法制」法案に対する声明

（年表作成・松田優）

日本ペンクラブにはこんな行事があります

仲間を見つけましょう

「ペンの日」懇親会

日本ペンクラブの創立は1935（昭和10）年11月26日。この日を「ペンの日」と定め、毎年、盛大な懇親会を開催しています。会員はもちろんのこと、日本文藝家協会、日本近代文学館、賛助会員の企業や文化団体、マスメディアなどの関係者もお迎えし、会員同士の親睦を深めます。

京都例会

関西在住の会員を中心に、毎年京都で開かれてきた、懇親と交流の集まりです。

総会

毎年6月に行われ、さまざまな議案が審議され、その後、懇親会も開かれます。そこで新入会員の紹介もあります。

ふるさとと文学

毎年1回、ある場所とそこと関わりの深い作家をとりあげるイベントです。日本ペンクラブ創立80周年の2015年、第1回の「島崎藤村の小諸」から始まりました。各自治体と連携しつつ、オリジナル映像や朗読、対談などをステージ上で展開します。

そして日本ペンクラブの大きな活動として「声明」があります

言論・表現の自由の擁護は日本ペンクラブの最大のテーマです。この自由を抑圧する内外の動き、さらには人権抑圧や環境破壊、戦争や核実験に対して、私たちは抗議と反対の意思を声明にまとめ、記者会見を開くなどして公表しています。

入会案内

日本ペンクラブは、言論・表現の自由と平和を守り、世界の文学者と交流する団体です。表現活動に専門的・職業的に携わっていて、11ページの「国際ペン憲章」に賛同して下さる人たちに、広く開かれています。

国際ペンの「PEN」はもともと、ポエット、プレイライトの「P」、エディター、エッセイストの「E」、ノベリストの「N」でした。しかし、21世紀の表現活動がジャーナリズム、映像、音楽、漫画、インターネットなどへ多様化している現在、入会資格も広がっています。

日本ペンクラブの会員区分は下記のようになっていますが、そのような活動に直接関わっていなくても、準会員としてペンクラブの活動に参加することが出来ます。

入会金は1万円、年会費は会員2万円、準会員1万円です。入会希望者は、入会申込書に写真、あれば著書を添えて提出していただきます。その際、会員2名（うち1名は理事）の推薦が必要ですが、詳しくは――**日本ペンクラブ事務局（info@japanpen.or.jp）に**お問い合わせください。

会員区分

P 会員　*Poets、Playwrights*

詩人、俳人、歌人、脚本家、劇作家、放送作家

E 会員　*Editors、Essayists*

エッセイスト、翻訳家、学者、編集・出版人、記者、ジャーナリスト、評論家、漫画家、映画監督、放送番組制作者、俳優、演出家、画家、装幀家、デザイナー、写真家、書店・図書館・美術館・博物館・文学館等の専門職員

N 会員　*Novelists*

小説家、ノンフィクション作家、ネット媒体で活動する作家

賛助会員

日本ペンクラブと国際ペンの趣旨に賛同する一般企業、新聞社、出版社、文学館、書店、団体、組織と一般個人

賛助会員（2023年9月現在　50音順）

（株）朝日新聞東京本社、アチーブメント（株）、（一社）家の光協会、（株）岩波書店、（株）NHK出版、（株）エフビーアイ・コミュニケーションズ、（株）カタログハウス、（株）KADOKAWA、（株）カルチャー・プロ、（株）河出書房新社、（株）紀伊國屋書店、（一社）共同通信社、（株）暮しの手帖社、（株）クレディセゾン、（株）幻冬舎、（株）講談社、（株）光文社、（株）時事通信社、（株）集英社、（株）小学館、松竹（株）、（株）新潮社、セレモアホールディングス（株）、全国農業協同組合連合会、大日本印刷（株）、（株）太平印刷社、大和自動車交通（株）、（株）中央公論新社、（株）中日新聞社、（株）TTJ・たちばな出版、東京書籍（株）、（株）東京創元社、（株）徳間書店、（株）日刊現代、（株）日本経済新聞社、（一財）日本出版クラブ、日本放送協会、（株）文藝春秋、（株）平凡社、（株）毎日新聞社、光村図書出版（株）、明治学院大学、（株）読売新聞東京本社

THE JAPAN P.E.N. CLUB GUIDE

日本ペンクラブガイド

2024年6月20日　発行
発行人　桐野夏生　　編集人　小林加津子
表紙・本文イラスト　宮下和
デザイン　ハイ制作室
発行所　一般社団法人　日本ペンクラブ
〒103−0026　東京都中央区日本橋兜町20−3
TEL：03−5614−5391　FAX：03−5695−7686
e-mail：info@japanpen.or.jp
URL：https://japanpen.or.jp/

YouTube［公式チャンネル］日本ペンクラブ
www.youtube.com/@japanpen

©THE JAPAN P.E.N. CLUB 2024　Printed in Japan